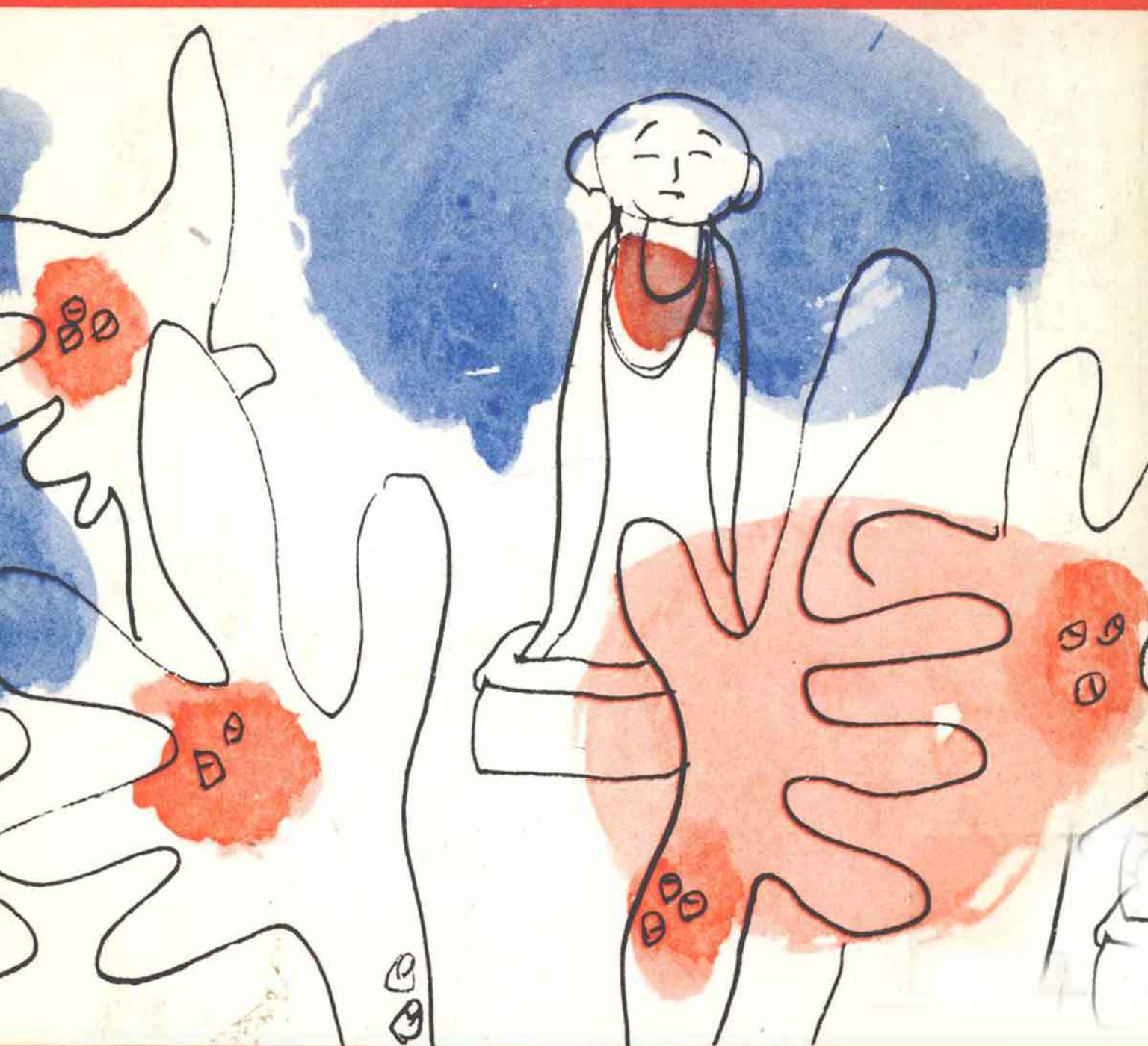


いぼじぞう

高橋秀雄



文芸広場叢書18

いぼじぞう

高橋秀雄

文芸広場叢書18



著者略歴

本名高橋秀雄、昭和9年2月19日生、昭和31年駒沢大学仏教学部卒業、同年広徳院住職(曹洞宗)、同年より中学校教諭、昭和38年文芸広場年度賞(俳句)、昭和43年毎日俳壇賞、昭和44年埼玉朝日文化賞、同年埼玉俳句賞、昭和46年中学校教諭退職、昭和48年文芸広場年度賞(童話)、現住所埼玉県北埼玉郡川里村大字広田896番地

いほじぞう

文芸広場叢書18

昭和50年11月10日 印刷
昭和50年11月14日 発行

¥ 600
= 実費

著者 高橋秀雄
発行者 公立学校共済組合本部
印刷所 弘報印刷株式会社
発行所 公立学校共済組合本部
東京都新宿区南元町23番地
電話東京(359)8231番

乱丁、落丁本は発行所でお取りかえいたします。

序

福田清人

公立学校共済組合から「教職員の文芸誌」と銘うって、『文芸広場』が刊行されている。そして、誌友の文芸作品を選んで掲載している。私が童話の選を引き受けてから、すでに六、七年になる。そういうことから、高橋君の作品に接する機縁が生まれた。

ところで、同誌は、毎年一回、前年度の各文学分野で、最も活躍し、すぐれた作品を寄せられた人、一名乃至二名に年度賞を与える慣しになっている。高橋君は四十七年度の童話部門で活躍し、四十八年春、その賞を受けた。

その時の感想に、高橋君は、昭和四十七年七月号から、毎月一作を目標に、『文芸広場』に童話を送ったこと、以前は俳句に熱中していたが、現在は童話一点ばりでやって行きたい、そしてその方向として「これからも、宗教的感情につながる童心をあたためながら、一作一作を大事に書いていきたい」との決意を記している。同君が童話を書き出して僅か一年半ばかりで、それ以前から長く書きつづけた人もあったのに、こうした年度賞を受けるほど、出色の作品を書いた原因はいったいなんだろう。

私は、この原稿に添えられた著者の略歴で初めて知ったことだが、『文芸広場』でも、すでに十年ほど前、中村草田男選で俳句の年度賞を受け、その他数々の俳句賞を受けている文学歴が著者にはあったのである。

俳句は観察を鋭くし、表現を簡潔にするから、文章を書くにも役だつ。それで小説家も

句作の修練をなすべきだと、かつてある有名な小説家は門下生にすすめた話があるが、これは童話も同じことである。

高橋君の童話は、この句作によつての鍛練があつたことから文章に無駄がない。描写が生きている。そして観察が鋭いことはたとえば「二ひきのあり」等で見られる通りである。また著者はかつて夜寝る前に、愛児に思いつくままの話をしてやつた。それをもとにして作品ができないものかと考えて、少しずつまとめる氣となつたことを「あとがき」に記している。

外国の作家で童話のなりたちに、これに類した挿話がよくあるし、そもそも近代の創作童話の成立もこうした口で語られた昔話、家庭話からの発展の結果とみられる。高橋君もこうした体験を自らして童話を書き出したことが面白いことと思ひ合わされる。

それに、この著者は、すでに記すように「宗教的感情につながる童心をあたためながら」というはっきりした姿勢を持っていることである。この姿勢はすなわち一貫した文学精神である。

これも略歴を見て、今度、私の初めて知つたことであるが、著者は大学の仏教学部を出て、禪寺の住職、そして中学の教職に十余年あつた人である。この姿勢は、信仰から来た思想の強い柱である。「地獄」「善人の山悪人の谷」「けがれ」等には、作者のこうした

姿勢が強く示されている。

しかし、私は、略歴で知るまで、著者が宗門の人とは知らなかった。そう知って、著者の童話に、地藏さまや、お寺の境内がしばしば描かれていることも、初めてうなずかれる。以前、私は武蔵野の自然も残っていよう、著者の風土のせいかと思った。それほど著者はそれらもよく作品のなかに溶かしこんでごく自然に文学として昇華しているのである。

また宗教色のある作品も、いわゆる仏教童話の域を脱して、現代感覚で接しているので新鮮さがある。

題材によって、色々な手法を試み、渾然とまとまっているこの多彩な童話集は、児童やまたかつて児童であった大人たちの童心に、時にほのぼのとしたものを与え、時にぐっとせまるものも、満しており、なかなか充実している。

昭和五十年九月

目次

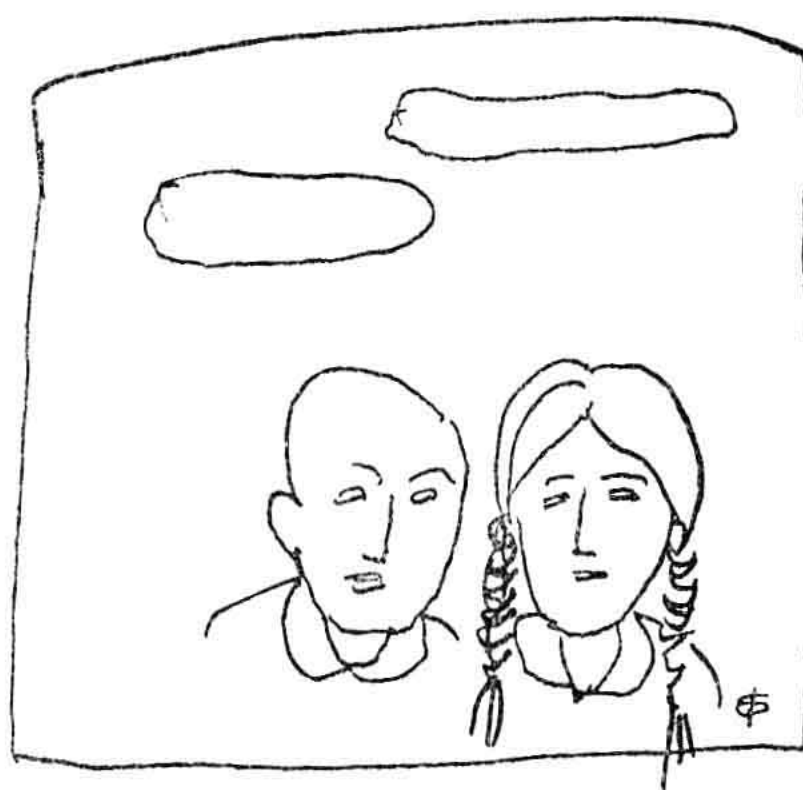
序	福田清人
いぼじぞう	7
おじいさん	17
二ひきのあり	27
さかなとり	35
百万べん	45
菜の花	53
小天地蔵	61
流し雛	67
地獄	75
善人の山と悪人の谷	81
まんじゅしゃげ	89
首かけ地蔵	97
泣き虫ないた	105
かぐらだいこ	115

デブタンの歌	127
月夜の笛	133
ふたつのどんぐり	143
いねとさつまいも	157
あとがき	207



王さまありと五ひきのけらいあり	165
とりかえっこ	179
おんじつ原	187
けがれ	199
あとがき	207

い
ぼ
じ
ぞ
う



もも子ちゃんは、いつの間にか左手の中ゆびのつけねのところに、米つぶの半分ぐらいのいぼができてゐるのに気づきました。それから、はやくなおるといいのにと感じていました。

なん日かたって、いぼがなおったかなと思つたら、前のいぼのすぐとなりにもうひとつできていました。もも子ちゃんは、ほんとにいやになつちやうと思いました。

あるとき、友だちのうめ子ちゃんにそのことを話すと、「わたしも前にいぼができてこまつたことがあるの。いぼがなおるようにと、そのことばかり考えていたら、どんどんふえてしまったわ。いぼのことなんか忘れてしまったら、しぜんになおっちゃつたの。だから、もも子ちゃんも、いぼのことなんか忘れてしまえばいいのよ。」というのです。

でも、もも子ちゃんはどうしても氣になつて、いぼのことを忘れることができません。早くなおるようにと、いつも思つてしまふのです。おふろにはいったときは、せっけんをいっぱいつけてゴシゴシとこすつたりするのだけど、ちつともききめがないのです。なおるところかましますふえて、とうとういつのまにか十こぐらいになつてしまったのです。

日よう日のことです。もも子ちゃんはひなたぼっこしているおばあちゃんに、「いぼがどんどんふえてこまつちやうの。」と話しました。おばあちゃんは「どれどれみせてごらん。」というので、もも子ちゃんが手をさしだすと、「あ、こんなかわいらしいいぼなんかすぐになおしてもらえますよ。」というのです。

「だれになおしてもらうの。」

「おじぞうさまだよ。おじぞうさまにおねがいすれば、かんたんになおっちゃうよ。」

「どこのおじぞうさんなの。」

「お寺の前の、ほら、道のかどに屋根のついたおじぞうさまが立ってるだろう。あのおじぞうさまは、いぼじぞうさまといって、とってもいぼをなおすのがじょうずなほとけさんなんだよ。」

もも子ちゃんは、そんなことうそにきまつてると思いました。ただの石のじぞうさんなんか、いぼがなおせるはずがないと思うのです。

でも、おばあちゃんはひなたぼっこをやめ、おかつてに行って豆をゆではじめました。豆があまりやわらかくならないようにゆでられると、白糸を通したはりで豆をいくつもいくつも通し、長いじゆずのようなものをつくりました。つぎに、白い布をきって、はぼの広いひものようなものをぬいはじめました。そして、おばあちゃんはもも子ちゃんに、お習字の用意をしなさいといいつけるのです。もも子ちゃんはなにがなんだかわかりませんでしたけど、おばあちゃんのいうとおりにすみをすりしました。おばあちゃんは白いひもに筆で、（ほうのう あかいもも子）と書きました。

そして、「これでできあがりだよ。さあ、もも子ちゃん、いっしょにおじぞうさまにおねがいにいらおう。」というのです。もも子ちゃんはなんだかとっても変な感じがしました。おもしろいことをするようにも思われるし、ばかばかしいことのようにも思われたのです。でも、あんまりおばあちゃ

んがねっしんなので、なおるかどうかわかりませんでしたけど、行ってみる気になりました。

お寺まではそんなに遠くはないのですが、こがらしが吹きだして、とっても寒くて、いっしょにこないほうがよかったかなと思いました。

おじぞうさんの頭の上に、からすがとまっているのが見えてきました。まるで、もも子ちゃんとおばあちゃんをばかにしているかのように、ふたりがそうとう近づくまでからすはそうしていましたが、やがて、うるさい人たちがきたなといったげに、とんでいってしまいました。

おばあちゃんは白いひもを、おじぞうさんの肩からななめにかけてました。そして、「これは、もも子ちゃんのいぼがなおりますように、というおねがいのしるしなんだよ。」というのです。つぎに「この豆のじゅずはね、もも子ちゃんのいぼは、このおじぞうさまが全部もらってあげますよ、というしるしなんだよ。」といいながら、おじぞうさんの首にかけてました。それからせんこうをあげ、おばあちゃんは両手を合わせて長くおがんでいるのです。もも子ちゃんもおばあちゃんのまねをして、手を合わせて頭をチョコンとさげました。でも、寒くて寒くて、おばあちゃんのように長くはともおがんでいられません。だいいち、おじぞうさんなんて、人のかたちをしたただの石にしか思われないのです。もも子ちゃんは、おばあちゃんがおがみ終るまで、寒いのでかけ足の足ぶみをしていました。おばあちゃんはおがみ終ると、ほっとしたような顔つきで、「もう、もも子ちゃんのいぼはなおるよ、よかったねえ。」といいました。

それから、何週間かがすぎました。もも子ちゃんの手のいぼは、前よりもずっとふえて、二十こ近くになってしまいました。もも子ちゃんは、やっぱりおじぞうさんなんかにたのまないほうがよかったと思いました。

雪のふる日よう日なので、もも子ちゃんもおとうさんもおかあさんもおばあちゃんも、こたつにはいつていろいろなことを話しました。

もも子ちゃんはみんなに手のいぼを見せて、こまっていることを話しました。すると、おとうさんは笑いながらいきました。「そんなもの、いくらふえたって気にすることはないよ。一年もたてばなおるだろう。」と。もも子ちゃんは、おとうさんがちっとも心配してくれないと思って不満でした。おかあさんは、すこし心配そうな顔つきで、「今のところたいしたことはなさそうだけど、もっともっとふえるようだったら、お医者さんにみてもらいましょうね。」といいました。もも子ちゃんは、すこし安心しました。でも、お医者さんにメスできられたりしたら、と思うとやはり心配でした。おばあちゃんはさきほどから、すまなそうな顔をしてなんにもいいません。もも子ちゃんは、おばあちゃんがあんなに心配してくれたんだから、おばあちゃんにはいわないほうがよかったかなと思いました。

午後は雪がやみました。おばあちゃんは長ぐつをはいて、ひとりで外に出かけようとしています。もも子ちゃんが「おばあちゃんどこへ行くの。」とたずねると、おばあちゃんは、「もも子ちゃ

んのいぼをなおしてもらいに行くんだよ。あれっきり、ちっともおねがいになかったから、おじぞうさまが忘れてしまったのかもしれないからね。」

と、心配そうにいうのです。もも子ちゃんは、やっぱりこたつで話したことをおばあちゃんは気にしているんだ、すまないなあと思いました。

「そんなら、あたいもいく。」

もも子ちゃんも長ぐつをはき、外に出ました。雪のふったあとというのに、日がさしてわりあいあたたかい。

日の光をはねかえしてまぶしい雪の中の道を、おどるようにして歩く。お寺の屋根もまっ白、野原も木々もおじぞうさんの屋根もまっ白です。おばあちゃんが歩くたびに、ギシッギシッと雪が鳴る。もも子ちゃんが歩くたびに、キシッキシッと雪が鳴る。

ふたりがおじぞうさんの前までくると、おじぞうさんの足もとから、さっととび出してにげていくものがありました。あんまりはやかったのとびっくりしたのとで、もも子ちゃんはなにがとび出したのかわかりませんでした。

「おばあちゃん、今のなあに。」

「うさぎだよ。雪がふったので、すむところがなくなって、おじぞうさまに助けてもらっていたのだらうよ。おじぞうさまは、人間だけでなくなんでも助けてくださるんだよ。」

もも子ちゃんは、おじぞうさんの顔をよくみつめました。

やさしい目、こどものように小さい口、ゆたかなほっぺ、そして、どんな苦しみものりこえてきて安心してゐるような顔つきを見て、おじぞうさんは、だれか人間が作ったものにちがいないけど、なんだかとってもきれいな心をもっているように思われてきました。

おばあちゃんは、また長くおがみました。もも子ちゃんは、長くはおがんでいませんでしたけど、おじぞうさんにしたしみを感しました。いぼをなおしてくれるということは信じませんでしたけど、おじぞうさんの心ってりっぱなんだろうなあと思ったのです。

おじぞうさんのおまいりがすむと、おばあちゃんは、

「もも子ちゃん、おばあちゃんはね、これからちよっと買いものをしていくから、さきに家に帰っていなさいね。」

といって、別れてしまいました。

おばあちゃんはもも子ちゃんと別れると、くすり屋さんへ、いぼをなおすくすりを買いに行ったのです。

それからまた、何週間かがすぎました。その間、おばあちゃんは、もも子ちゃんが寝てしまふと、まいばん手にくすりをぬってあげました。そして、まいあさおじぞうさんにおまいりしました。風の吹く朝も、雪のふる朝も、霜のひどい朝も、一日もかかさずおじぞうさんにおまいりして

いたのです。

もうすっかり春めいて、桜のつぼみも大きくふくらみ、早いのはひとつふたつ咲きはじめてました。木の芽も出はじめました。もも子ちゃんのだいすきな春になったのです。

春休みになった最初の日、おばあちゃんがもも子ちゃんにいいました。

「もも子ちゃん、きょうはいっしょにおじぞうさまにおまいりにいこう。」

そういわれて、もも子ちゃんは思わず手をみました。もも子ちゃんは、しばらくいぼのことを忘れていたのです。ところが、いつのまにかもうすっかりなおっているのです。もも子ちゃんは、うれしくなっていました。

「あれ、おばあちゃんもうひとつもないよ。」

「そう、おじぞうさまがなおしてくれたんだね。よかったねえ。」

「おばあちゃん、もうなおったのだから、おじぞうさんにおまいりにいなくてもいいんでしょ。」

「なおったからいくのだよ。どうもありがとうございましたってね。」

「あ、そうね。お礼にいかなくちゃわるいわね。」

もも子ちゃんとおばあちゃんは出かけました。歩きながら、おばあちゃんは、もも子ちゃんの手にくすりをぬっていたことを話しました。でも、くすりだけでなく、おじぞうさんも助けてくれたんだよ、といいました。もも子ちゃんは、くすりがなおしたのか、おじぞうさんがなおしてくれた